

金銭的価値を伴う人間の行動選択における偏好性について

大久保 直方

【背景と目的】

人間は常に何らかの選択をしながら生きており、その選択の数だけ人間行動の在り方も存在すると言える。そして、そのような人間行動の中に共通する原則を見出そうとする研究が古来より数多く行われてきた。それらの研究の多くは、行動の対象となる事象を「利得か損失か」といった“質”的な違いによって区別することで人間の行動傾向を明らかにしようとしてきた。しかし、そのような質的な違いに基づく研究はすでに飽和状態にあり、新しい側面からのアプローチが必要になってきている。そこで、本研究では、行動の対象を「その対象に対して感じる価値(主観的価値)の大きさ」という“量”的な違いによって区別することで人間の行動傾向を明らかにすることを試みた。なお、本研究においてはプロスペクト理論(Kahneman & Tversky, 1979)の中の価値関数の y の値の絶対値を「主観的価値」の大きさとして定義した。

【実験概要】

実験 1 では、「人間の行動順序には主観的価値の大きさが影響を与えている」という仮説を検証することを目的とした。実験手続きは、価値関数に基づいてインセンティブの条件を 5 つ設定し、代用貨幣を使用したこと以外は Freitas et al. (2002)による実験手続きを踏襲した。その結果、先のプロスペクト理論の中の価値関数のグラフを改定する必要性と、人間の行動順序が主観的価値の大きさに影響されているという仮説が示唆された。そこで、実験 2 では、インセンティブが複数存在する状況でも実験 1 で得られた仮説が支持されるのか検証することを第 1 目的とした。また、現実世界との適合性を考慮するために制限時間が無い条件と制限時間が有る条件を設定し、双方の状況でどのような行動傾向がみられるのか探索的に検討することを第 2 目的とした。その結果、制限時間が有る条件においてのみ主観的価値の大きさに従って人間の行動生起順序が決定されていたことが明らかになった。具体的には、制限時間が有る条件においては主観的価値の大きいインセンティブから優先的に選択されていた。このことは、本研究で改定した価値関数のグラフと、人間の行動傾向に対して主観的価値という観点を導入することの妥当性・有用性を部分的に示唆するものであった。

【考察】

本研究では、1) 利得より損失の主観的価値が大きい場合は損失を防ぐための努力が優先されること、2) 損失よりも利得の主観的価値の方が大きい場合であっても利得を獲得するための努力が優先されるわけではないこと、3) 制限時間が設けられている状況において主観的価値の大きさによる影響が顕著になることが明らかになった。これらは、人間の行動が生起する順序に主観的価値の大きさというインセンティブの“量”的な違いが影響していることを示唆するものであった。ただし、2) の“損失よりも利得の主観的価値の方が大きい場合であっても利得を獲得するための努力が優先されるわけではない”という点に関しては、個々人のパーソナリティが関係している可能性がある。この点を含め、更なる研究が行われることで、将来的には行動順序のコントロールや行動生起を促す環境の意図的な創出など、随意に個人の行動を動機付けることも可能になると考えられる。(基礎心理学)